2011年スペシャルオリンピックス夏季世界大会の状況と国内未普及競技の展望

A study for 2011 Special Olympics World Summer Games ATHENS GREECE and prospects for domestic unspread sports of Special Olympics Movement in the future.

井　上　明　浩
Akihiro Inoue

〈要旨〉

欧米では，障害者スポーツはすでに特別なものではなく一般スポーツの一つのカテゴリーとして一般競技団体の一つとして数えられるようにその存在が確立しつつある。競技の普及振興も，一般競技団体がジュニア層や一般市民，高齢者と共に障害者をその範疇に含めるようになりつつある。スペシャルオリンピックス日本が，中央一般競技団体との連携を深め，指導者の派遣協力を仰げば，地方の地区組織においても協力要請が飛躍的に進むであろう。逆に捉えれば，これまで健常者のみをその対象とし，障害者スポーツを蚊帳の外としてきた競技団体は，知的障害者をはじめとする全ての障害者をその対象として，競技の普及振興にあたってこそ，これからの競技団体の在り方であろう。またスペシャルオリンピックスの全ての競技においての慢性的なコーチ不足解消につながる可能性は，総合型地域スポーツクラブと今後どのように連携していくかが課題となろう。

〈キーワード〉
スペシャルオリンピックス，未普及競技,インクルーシブスポーツ

１．はじめに

2011年６月26日から７月３日の８日間，ギリシャ国アテネ市で第13回スペシャルオリンピックス夏季世界大会が開催された。スペシャルオリンピックス夏季世界大会史上，２回目のヨーロッパでの開催となった。今回の世界大会は，古代オリンピック発祥の地，紀元前331年パンアテナ大会そして1986年第１回近代オリンピックを開催したPanathenaikon Stadiumで開会式及び閉会式が執り行われた。今大会は，世界175カ国から約7,000人のアスリート，コーチ2,000人，審判員1,100人，大会運営員3,000人を超すボランティアに支えられ，盛大に開催された。[1)]

現在のギリシャ共和国は古代ギリシャから発生し，また世界の国々の言語体系（アルファベット，単語）多くはギリシャ語から派生したものと考えられ，西洋哲学や歴史学，学問，演劇などの文化，そして民主主義の礎を築きあげた国である。しかしギリシャは，最近経済危機に直面しその影響がEU諸国への経済不安を招くなど，開催自体が危ぶまれた。この大会は，2008年２月14日から，地元スペシャルオリンピック・ギリシャの大会組織委員会が準備に着手したが，当初の国からの経済的援助が大幅に削減されたものの，大会運営そのものは，そのような影響をほとんど感じさせなかった。今大会で13回を数える夏季世界大会に，開催された22公式競技に，日本は水泳，陸上，バドミントン，卓球，テニス，ボウリング，ゴルフ，体操，バレーボールの以上９競技に選手52人，コーチ・役員23人計75人の日本選手団として臨んだ。1962年にアメリカで始まったこの活動は，もうすぐ半世紀を迎えようとしているが，４年に一度開催される世界大会は常に大規模で誠に華やかな大会である。

本研究では，1980年にスペシャルオリンピックスが日本に伝播し，日本スペシャルオリンピック委員会が設立された後，その組織が解散し，スペシャルオリンピックス日本が1994年に新たに設立された経緯の中で，世界大会自体への参加状況が錯綜，不明な点が多いため，先ずは，今世界大会アテネのFESTIVAL SPECIAL OLYMPICSに展示されていたパネルを基に，国内に残る資料を加味して，まずその状況を整理する。次にスペシャルオリンピックスが日本に導入されて，30年以上が経過する中で未だ国内未普及競技があるのは何故なのか。今大会においても，22公式競技中，日本がエントリーしたのは９競技のみである。知的

障害者スポーツの世界最大のスポーツの祭典であるスペシャルオリンピックスは，その公式競技として開催されるということは，世界中の殆どの国において，そのスポーツが国レベルで普及していることを意味している。つまりそれらの競技は，知的障害者スポーツにおける国際的競技とも言えるのである。今大会の全競技を概略する中で，特に国内未普及競技についてその展望を述べたい。

２．世界（国際）大会の変遷と日本の参加

スペシャルオリンピックスの活動は，1962年故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバー夫人が，自宅の庭を開放し開いたデイ・キャンプがその始まりである。彼女の姉ローズマリーは知的発達障害があった。1968年ジョセフ・P・ケネディJar財団の支援により「スペシャルオリンピックス」は組織化され，同年７月20日，最初の国際大会をアメリカ・イリノイ州シカゴのソルジャーフィールドで開催した。以下はその後の世界大会の変遷である。

世界（国際）大会変遷[2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16)]

第１回夏季国際大会　1968年
アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ
２カ国　アメリカ合衆国26州，カナダ　1,000人
陸上，水泳，フロアーホッケー

第２回夏季国際大会　1970年
アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ
３カ国　アメリカ合衆国50州，コロンビア自治区，フランス，プエルトリコ　2,000人

第３回夏季国際大会　1972年
アメリカ合衆国コロンビア州ロスアンジェルス
３カ国　2,500人

第４回夏季国際大会　1975年
アメリカ合衆国ミシガン州マウントプレザント
12カ国　約3,241人　12競技

第１回冬季国際大会　1977年
アメリカ合衆国コロラド州スティームボートスプリングス
２カ国　アメリカ合衆国州，カナダ　346人　４競技

第５回夏季国際大会　1979年
アメリカ合衆国ニューヨーク州ブロックポート
20カ国以上の国　3,500人

第２回国際冬季大会　1981年
アメリカ合衆国バーモント州スマグラーズノッチストウ
７カ国　600人

第６回夏季国際大会　1983年
アメリカ合衆国ルイジアナ州バトンルージュ
48カ国　4,000人　13競技
日本スペシャルオリンピック委員会（JSOC）初参加
日本選手団６人

第３回国際冬季大会　1985年
アメリカ合衆国ユタ州パークシティー
14カ国　825人
日本選手団８人

第７回夏季国際大会　1987年
アメリカ合衆国インディアナ州サウスベント
70カ国　4,700人
日本選手団30人

第４回国際冬季大会　1989年
アメリカ合衆国カリフォルニア州レノ，
ネバタ州レイクタホ
18カ国　1,000人
日本選手団５人

第８回夏季世界大会　1991年　今大会より世界大会に改称
アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス，セントポール
100カ国　6,000人　16競技
日本選手団選手25人，コーチ16人，役員２人

第５回冬季世界大会　1993年
オーストリア　ザルツブルグ，ジェラードミング
63カ国　1,600人
新体制スペシャルオリンピックス日本（SON）初参加
日本選手団選手２名，コーチ３名，役員５名

第９回夏季世界大会　1995年
アメリカ合衆国コネチカット州ニューヘブン
143カ国　7,200人　19競技
日本選手団選手20名，コーチ７名，役員３名

第６回冬季世界大会　1997年
カナダ　トロント
73カ国　1,450人　５競技
日本選手団選手８名，コーチ５名，役員４名

第10回夏季世界大会　1999年
アメリカ合衆国ノースキャロライナ州ローリー，ダーラム，チャペルヒル
150カ国　7,000人　19競技
日本選手団選手31人，コーチ11人，役員３人

第７回冬季世界大会　2001年
アメリカ合衆国アラスカ州アンカレッジ，イーグルリバー
80カ国　3,000人　６競技１公開競技
日本選手団選手10人，コーチ３人，役員２名

第11回夏季世界大会　2003年
アイルランド　ダブリン
150カ国　6,500人　18競技３公開競技
日本選手団選手53人，コーチ20人，役員４名

第８回冬季世界大会　2005年
日本　長野
86カ国　1,829人　７競技
日本選手団選手109人，コーチ37人，役員６名

第12回夏季世界大会　2007年
中国　上海
164カ国　7,500人　21競技４公開競技
日本選手団選手80人，コーチ23人，役員３名

第９回冬季世界大会　2005年
アメリカ合衆国アイダホ州ボイジー
100カ国　2,000人　７競技
日本選手団選手82人，コーチ37人，役員６名

３．国内スペシャルオリンピック普及競技

３－１　日本スペシャルオリンピック委員会設立から解散まで

日本スペシャルオリンピック委員会（Japan Special Olympics Committee = JSOC）が1980年４月に発足した。翌1981年10月第１回日本スペシャルオリンピック全国大会（神奈川県藤沢市体育センター）が開催され，その後1982年に第２回大会を東京（東京都駒沢オリンピック公園）で，第３回を1983年に大阪（大阪市長居運動公園）で，1986年に第４回を東京で，1987年に第５回大会を大阪で，1990年に第６回大会を東京で開催した。そして1991年に第７回大会を大阪で開催し，この大会を持ってスペシャルオリンピック大会は幕を閉じた。この11年間の開催競技つまり国内普及競技は以下のとおりである。

陸上競技，水泳，フライングディスク，卓球，
ボウリング，サッカー，バスケットボール，
バレーボール，ソフトボール
計９競技

３－２　スペシャルオリンピックス日本の誕生から現在

1992年に日本スペシャルオリンピック委員会が解散したが，その組織が最後に派遣した1991年の夏季世界大会（ミネソタ州ミネアポリス）の日本選手団の中に体操競技のコーチを務めた中村勝子氏がスペシャルオリンピックスの再興を願い，彼女の地元熊本県の当時の知事細川護熙夫人の細川佳代子氏を頼り，1993年３月スペシャルオリンピックス熊本が設立された。その後1994年11月にスペシャルオリンピックス日本（SON）が誕生し，この時を持って，JSOCの活動はSONに引き継がれることとなった。1995年には熊本で全国大会が開催され，以後４年に１回世界大会の前年に，夏季・冬季のナショナルゲーム（全国大会）を２年毎に繰り返し開催している。1995年第１回スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム熊本大会では，水泳競技，陸上競技，体操競技，バレーボール，ボウリングの５競技そして1996年第１回スペシャルオリンピックス日本冬季ナショナルゲーム宮城大会では，アルペンスキー１競技，同福岡大会ではスピードスケート競技１競技であったが，直近の2010年第５回スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム・大阪では，水泳競技，陸上競技，バドミントン，バスケットボール，ボウリング，サッカー，ゴルフ，体操競技，卓球，テニス，バレーボール，フライングディスクの12競技そして2008年第４回スペシャルオリンピックス日本冬季ナショナルゲーム・山形では，アルペンスキー，スノーボード，クロスカントリースキー，スノーシューイング，スピードスケート，フィギュアスケート，フロアーホッケーの７競技が行われている。

つまり現在の国内普及競技を整理すると以下のとおりとなる。

[夏季競技]
水泳競技，陸上競技，バドミントン，バスケットボール
ボッチャ，ボウリング，馬術，サッカー，ゴルフ，
体操競技，ソフトボール，卓球，テニス，バレーボール，
自転車競技，フライングディスク（国内のみ実施）
計16競技

[冬季競技]
アルペンスキー，クロスカントリースキー，
スノーボード，スノーシューイング，
ショートトラックスピードスケート，
フィギュアスケート，フロアーホッケー
計７競技

４．2011年スペシャルオリンピックス夏季世界大会概要及び参加状況

2011年６月26日から７月３日の８日間，ギリシャ共和国アテネ市で第13回スペシャルオリンピックス夏季世界大会が開催された。スペシャルオリンピックスは，もともとアメリカ発祥であり，まずアメリカ合衆国内に浸透していった経緯があるため，これまでの夏季世界大会も圧倒的にアメリカ合衆国国内での開催が多い。今大会で13回目を数えるが，ヨーロッパでの開催は２度目となる。

開催国ギリシャの面積は，約3038Km^2，人口は，約1113万人，人口の３分の１弱の319万人あまりがアテネ首都圏に集中している。先ず，開閉会式は1896年第１回近代オリンピックが開催された馬蹄形のパナティナイコ・スタジアムで行われた。開会式は，世界的に著名なスターが司会やゲストを務めるが，今回はバネッサウイリアムスが司会を務め，スティービーワンダーがゲストとして招かれ，その華やかさを一層際立たせた。

2011スペシャルオリンピックス夏季世界大会開会式

また今回の各競技会場はそのほとんどが，アテネオリンピックで使用された会場を使用して行われたため，どの競技においても，世界大会として十二分な施設設備であると言えよう。

４－１　国内普及競技における今大会日本参加競技概況[17) 18) 19)]

陸上競技：競技日数８日間
３カテゴリー23種目
日本選手男子６人，女子２人，コーチ３人
参加国162カ国　男子582人，女子502人

スペシャルオリンピックスの発祥当時からある競技であり，常に最も参加国，出場選手数が多い競技である。日本国内においてもそれは同様である。

陸上競技

水泳競技

水泳競技：競技日数８日間
４カテゴリー38種目
日本選手男子３人，女子３人，コーチ３人
参加国115カ国　男子370人，女子321人

陸上競技同様にスペシャルオリンピックスの発祥当時からある競技であり，陸上競技に次いで参加国，出場選手数が多い競技である。日本国内においてもそれは同様である。

バドミントン：競技日数８日間
4カテゴリー38種目
日本選手男子３人，女子３人，コーチ３人
参加国115カ国　男子370人，女子321人

日本国内では世界大会前年に開催されたナショナルゲーム大阪大会には11地区からの参加があり，参加地区の多くは西日本という偏りはあるものの，普及が見られる。

バドミントン

バスケットボール

バスケットボール：競技日数９日間
３カテゴリー19種目
日本選手団参加なし
参加国55カ国　男子439人，女子164人

日本国内でも人気競技である。ナショナルゲーム大阪大会には131人が参加しており，水泳競技，陸上競技，ボウリングに次いで４番目に参加者数が多かった。

ボッチャ：競技日数８日間
３カテゴリー５種目
日本選手団参加なし
参加国90カ国　男子164人，女子152人

パラリンピックの公式競技であるボッチャとはコートの形や広さ，ルールがかなり異なっている。日本国内でもごく限られた地域でのプログラムが見られるだけであり，直

近のナショナルゲームの競技としても開催されていない。

ボッチャ

ボウリング

ボウリング：競技日数８日間
４カテゴリー５種目
［組数］
シングルス48，ダブルス26，チーム男７女２混合１，
ユニファイド１
日本選手男子３人，女子３人，コーチ２人
参加国49カ国　男子161人，女子134人
　日本国内でも人気競技である。ナショナルゲーム大阪大会には222人が参加しており，水泳競技，陸上競技に次いで３番目に参加者数が多かった。

自転車競技：競技日数８日間
9カテゴリー17種目
日本選手団参加なし
参加国37カ国　男子188人，女子128人
　日本国内はごく限られた地域でのプログラムが見られるだけであり，ナショナルゲームの競技としても開催されていない。

自転車競技

馬術

馬術：競技日数８日間
５カテゴリー５種目
日本選手団参加なし
参加国30カ国　男子63人，女子61人
　日本国内では2011年現在，神奈川，兵庫，岡山，熊本の４地区でプログラムが見られるだけであり，ナショナルゲームの競技としても開催されていない。

サッカー：競技日数８日間
５カテゴリー７種目
11人制３組，７人制５組，５人制10組，
ユニファイド11人制１組，ユニファイド７人制６組
日本選手団参加なし
参加国37カ国　男子932人，女子220人
　日本国内は近年人気が上がり多くの地域でプログラムが見られるようになり，ナショナルゲームの競技としても開催されたが，今回の世界大会では参加していない。

サッカー

ゴルフ

ゴルフ：競技日数４日間
４カテゴリー７種目
日本選手男子１人，女子１人，コーチ２人
参加国26カ国　男子74人，女子39人
　日本国内では参加アスリートはさほど多くはないが，2011年現在，長野，新潟，大阪，広島，福岡，熊本，宮崎，沖縄の８地域でプログラムが見られ，ナショナルゲームの競技としても開催されている。

体操競技：競技日数４日間
12種目
日本選手男子２人，女子２人，コーチ２人
参加国36カ国　男子78人，女子90人
　日本国内では参加アスリートはさほど多くはないが2011年現在，宮城，東京，大阪，山口，熊本の５地域でプログラムが見られ，ナショナルゲームの競技としても開催されている。

体操競技

ソフトボール

ソフトボール：競技日数６日間
１カテゴリー１種目
日本選手団参加なし
参加国６カ国　男子75人，女子17人
　日本国内でソフトボールは，手をつなぐ育成会が中心となって古くから取り組みがあるが，スペシャルオリンピックスのプログラムとしては愛知のみでプログラムが見られ

るだけであり，ナショナルゲームの競技としても開催されていない。

卓球：競技日数８日間
３カテゴリー５種目
日本選手男子２人，女子２人，コーチ２人
参加国72カ国　男子145人，女子122人
　日本国内では参加アスリートは多く，水泳競技，陸上競技，ボウリング，バスケットに次ぐメジャー競技と言える。無論，ナショナルゲームでも開催されている。

卓球

テニス

テニス：競技日数８日間
３カテゴリー５種目
日本選手男子２人，女子２人，コーチ２人
参加国33カ国　男子95人，女子59人
　日本国内では多くの地区でプログラムとして取り組みが見られ，ナショナルゲームも開催されている。

バレーボール：競技日数８日間
３カテゴリー５種目
日本選手男子８人，女子４人，コーチ３人
参加国18カ国　男子142人，女子89人
　日本国内では，宮城，東京，京都，熊本，大分の５地区でプログラムとして取り組みが見られ，ナショナルゲームも開催されている。

バレーボール

４－２　国内未普及競技における競技概況と今後の展望

セーリング：競技日数６日間
５カテゴリー６種目
参加国９カ国　男子36人，女子16人

　参加国，参加者ともに多いとは言えないが，アメリカ合衆国，オーストラリア，オランダ，イギリス，スペイン，ロシアなどが参加している。日本国内においても，パラリンピックの正式競技であることから，障害者のヨットレースや練習に知的障害者も参加するようになっており，スペシャルオリンピックスの各地区組織において，そのような団体との交渉により，プログラムへの普及が望めると思われる。

カヤック：競技日数４日間
５種目
参加国12カ国　男子35人，女子18人

　上述のセーリングと同様に，カヤックも参加国，参加者ともに多いとは言えないが，ポーランド，ロシア，フィンランド，ドイツなどが参加しており，アジアからはマカオ，台湾が参加した。日本国内でも既に総合型地域スポーツクラブでの実践がされており[20]，カヤックは全国的に多くの地域において普及していると言えるかもしれない。シーカヤック・タンデムのように二人乗りで安定性のある艇で健常者と一緒に始めるケースが多いが，比較的安全にプログ

ラムが始められると思われる。

ローラースケート：競技日数６日間
９種目
参加国22カ国　男子70人，女子51人

オーストリア，ドイツ，ハンガリー，カザフスタン，オランダ，ポーランド，ウズベキスタン，アジアからはインドや中国が参加した。日本国内では，ごく一部の特別支援学校や知的障害者福祉施設のレクリエーション的な活動に取り入れられているようであるが，その数は多いとは言えないであろう。しかしスペシャルオリンピックスでは設立当初からスピードスケートやフィギアスケートに取り組んでいることやその夏期のトレーニングの一環として取り組みもあることなどから，このローラースケートにおいてもその指導者さえ確保できれば，今後十分にプログラムに実施ができる可能性はあると思われる。

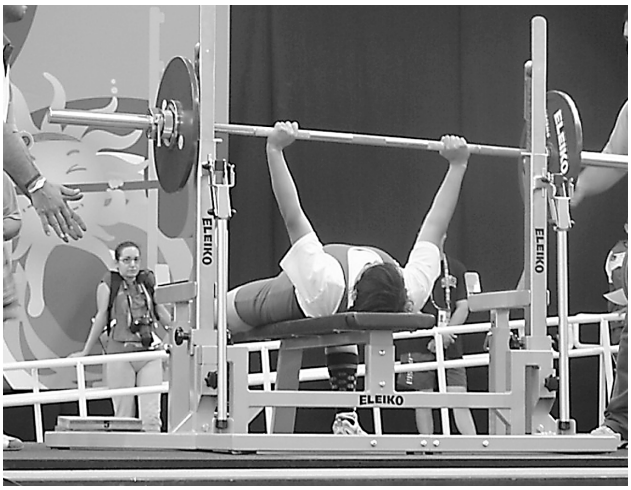
ハンドボール：競技日数４日間
３種目
参加国９カ国　男子105人，女子40人

上述のセーリングと同様に，最も参加国数が少ない競技である。日本国内においてもその実践例は，ほとんど聞いたことがない。しかし身体障害者の車椅子ハンドボールは行われており，ハンドボール協会の中には障害者スポーツとしてハンドボールの普及活動を試みようとしている動きがある。スペシャルオリンピックスは，バスケットボールは設立当初から人気が高い競技であり各地区組織で実践されており，ハンドボールはその動きやルールが，バスケットボールに比較的近い競技であることから，このハンドボールも決して普及できない競技とは言えないであろう。

新体操：競技日数４日間
５種目
参加国35カ国　女子109人

女子のみの競技であるが，参加国，参加者ともに比較的多いと言えよう。日本国内では，スペシャルオリンピックス日本設立のきっかけを作った中村勝子氏は，1991年のアメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリス・セントポールで開催された世界大会に，体操のコーチで参加した。以来現在まで体操競技プログラムは，ごく限られた地域ではあるが行われている。今後，この世界大会のアスリートの状況に見られたように，例えばダウン症のアスリートは柔軟性が高く，アップテンポのリズムを好むという特徴があり，参加者が多い。同様なことが日本国内にも無論言えるであろうことから，この競技もまた指導者の確保さえできれば，直ぐにでも始めることができるのではないかと思われる。

パワーリフティング：競技日数６日間
12カテゴリー５種目
参加国41カ国　男子142人，女子41人



世界的に見て知的障害者スポーツとしてかなり普及していると言える。一方日本国内でのパワーリフティング競技の普及に関しては，ほとんど皆無といっていい程であろう。そしてスペシャルオリンピックス日本においても，この競技が最も未普及であり，今後その取り組みに向けて課題が多いと言えるであろう。例えば国内普及競技としてかなり浸透している陸上競技や水泳競技のトレーニングの一環として，フリーウェイトによるウェイトトレーニングを積極的に取り入れているということは少なからず聞かれるようになってきたが，まだまだ一般的には，安全性の問題やウェイトトレーニング場の使用法やマナー，ルール―等，まずその端緒に就くための雰囲気作りが必要であろう。そのような素地を作りながら，㈳日本パワーリフティング協会の協力を受けながら，プログラムが展開できるように期待したい。

柔道：競技日数４日間
６カテゴリー６種目
参加国26カ国　男子89人，女子45人

柔道は，ヨーロッパ諸国から参加選手が多く見られ，アジアからは中国のみの参加であった。会場は異様な熱気に満ち溢れ，かなりレベルの高い試合が繰り広げられていた。試合中負けたアスリートが非常に悔しがっていた光景が印象的であった。また主審の「初め」や「１本」声が高らかに響き渡る会場の中，日本選手団が柔道競技に参加していないことは誠に残念であった。しかし国内では養護学校の体育授業として取り入れられていた実践例もあり，さらに元理事を務めていたロサンゼルス五輪男子柔道金メダリスト山下泰裕氏（東海大学体育学部長）が，現在でもスペシャルオリンピックスを支援しており彼の立場から，㈶全日本柔道連盟の協力を得，プログラム展開は十分可能であると期待できる。

５　スペシャルオリンピックス日本と国内未普及競技の展望

長野パラリンピックを契機として，障害者スポーツが所謂リハビリテーションの域を超え，一般的な競技スポーツ同様に競技性が強調されるようになってきた。設立して間もなかったスペシャルオリンピックス日本は，その流れとはあえて逆行し，むしろアンチテーゼとしてスペシャルオリンピックスが掲げるすべての者が勝利者という理念の下，独自路線を歩むことになった。さらにJSOCが運営していたスペシャルオリンピックが，後に行政主導でゆうあいピックとなり全国的な広がりを見せる中で，当時のSON会長の細川佳代子氏が提唱する民間主導の草の根運動という形をとってきた。さらにSONは設立当初，行政機関とはかなり距離を置く姿勢を如実に表しており，結果当時の福祉関連団体や障害者スポーツ団体はもとより，一般競技団体からはほとんど協力を得られないという事態を招いた。それらの状況を踏まえ，軌道修正を大幅に成す最大の契機となったのは，何と言ってもスペシャルオリンピック史上初のアジアでの世界大会開催となる2006スペシャルオリンピックス冬季世界大会長野大会であった。この大会を成功に導くことは国内外に向けたSONの究極のアピールになることは言うまでもなく，逆に命運が懸かっていたといえよう。結果としてこの大会を成功裏に終えることができ，障害者スポーツ団体や行政諸関連団体からSO活動の存在価値に一定の評価を得，SON自体の体質が，それらの団体との協調協力路線への転換を遂げることとなった。この世界大会開催は，これまであまり関心を示してこなかった一般スポーツ競技団体からの認知を得ることに少なからず追い風となったことであろう。

欧米では，障害者スポーツはすでに特別なものではなく一般スポーツの一つのカテゴリーとして一般競技団体の一つとして数えられるようにその存在が確立しつつある。例えばオリンピック選手とパラリンピック選手が，一般競技

団体主催の選手強化合宿に参加し，同じ時期に同じ場所同じ指導者から指導を受け，競技力向上を図るということが見られるようになってきた。同様に，その競技の普及振興発展も，一般競技団体がジュニア層や一般市民，高齢者と共に障害者をその範疇に含めるようになりつつある。一方，スペシャルオリンピックス日本は，㈶日本障害者スポーツ協会に加盟しており，その㈶日本障害者スポーツ協会は㈶日本体育協会に加盟している。言わばそのパイプはかなり前の段階から通って入るのである。しかしながら，スポーツプログラムの現場でその恩恵を受けるまでには至っていない。まずスペシャルオリンピックス日本が，中央一般競技団体との連携を深め，指導者の派遣協力を仰げば，地方の地区組織においても協力要請が飛躍的に行いやすくなるであろう。未普及競技の取りかかりに向けて，一般競技団体からの支援，協力はまさに救いの手となるであろう。逆に捉えれば，これまで健常者のみをその対象とし，障害者スポーツを蚊帳の外としてきた競技団体は，知的障害者をはじめとする全ての障害者をその対象として，その競技の普及振興にあたってこそ，これからの競技団体としての在り方であろう。

また，地域のスポーツ現場に近年徐々に浸透しつつある総合型地域スポーツクラブと今後どのように連携していくかも課題となろう。地域に住む障害者を含む幼児から高齢者すべての住民を対象に，多世代・多種目・多志向性を柱に，文部科学省と㈶日本体育協会が強力に推進するこのスポーツ施策は，今後の我が国におけるスポーツ環境を大きく再構築することを目指している。総合型地域スポーツクラブの中には，SO国内未普及競技のセーリングやカヤック，柔道等に障害者を含んでの取り組んでいるクラブがある。そして今後その傾向は広がる可能性がある。既に普及している競技のスポーツプログラムを含め，スペシャルオリンピックスの慢性的なコーチ不足解消につながる可能性は，今後総合型地域スポーツクラブとの良好な関係構築に懸っているとも言えるであろう。

注

1） xⅢ Special Olympics World Summer Games ATHENS 2011 Spectators' Guide. 2011
2） Festival Special Olympics Memorial photograph eexhibit. 2011
3） 井上明浩 「北陸における知的障害者スポーツの成立事情と展望―スペシャルオリンピックスを中心として―」北陸体育学会紀要 第47号 pp43-54 2011年
4） 遠藤雅子 『スペシャルオリンピックス』集英社 pp105－109 2004年
5） 日本スペシャルオリンピック委員会「第８回国際夏季スペシャルオリンピック大会選手必携」1991年
6） SOI「1991INTERNATIONAL SPECIAL OLYMPICS GAMES Official Program」1991
7） スペシャルオリンピックス日本「スペシャルオリンピックス世界大会報告書」1995年
8） SOI「1997 SPECIAL OLYMPICS WOLD WINTER GAMES Official Program」1997
9） スペシャルオリンピックス日本「1997第６回スペシャルオリンピックス冬季世界大会マニュアル」1997年
10）Special Olympics International Official Website http://www.specialolympics.org/history.aspx acquire information 17.12.2012
11）スペシャルオリンピックス日本公式ホームページ http://www.son.or.jp/about_son/history/index.html 情報取得 2011年12.17
12）スペシャルオリンピックス日本「1999年夏季世界大報告書」2000年
13）スペシャルオリンピックス日本「2001年冬季世界大会オリエンテーション資料」2001年
14）スペシャルオリンピックス日本「2003年スペシャルオリンピックス夏季世界大会・アイルランド ファミリー&応援団用資料」2003年
15）スペシャルオリンピックス日本「2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野大会公式写真集」2005年
16）スペシャルオリンピックス日本「Rainbow」vol.17 2007年
17） xⅢ Special Olympics World Summer Games ATHENS 2011 Sport Program
18）スペシャルオリンピックス日本「Rainbow」Vol.23 2010年
19）スペシャルオリンピックス日本「Rainbow」Vol.25 2011年
20）井上明浩，神野賢治，池田幸應「地域貢献に寄与するスポーツ文化発展の方策―地域スポーツへの障害者参加に関する研究―」金沢星稜大学総合研究所年報 No30 pp23-31 2010年